

# 「美」の言説における夏目漱石「草枕」の位相

— 子規・透谷の影響 —

相川直之

## はじめに

明治期の文壇は、例えば大正期のそれと比べてみても、百家争鳴たる色合いが強い。今回はその中でも特に「美」の言説における漱石「草枕」（明治三九・九『新小説』）の位相を考察する。なぜなら「草枕」には漱石自身の文壇における独自性の主張と、「美」の認識についてのこだわりとがあったからである。

「草枕」執筆時に文壇の存在を漱石が多分に意識していたことは書簡からも窺える。「明治三九年七月二七日付浜武元次宛書簡」に「草枕」執筆の様子と思われる述懐がある。「所がね今かいてるものはね出来損つても構はないが是非かいてしまはないと義理がわるいものでね毎日うん／＼と申した所で昨日からいゝ加減な調子で始めたのさ。ここでいう「義理」とは、自然主義主流の文壇で所謂反自然主義の立場をとった雑誌『ホトトギス』の仲間に対するものと見られる。さらに、「当時擡頭しつつあった、文壇の自然派的傾向に対して、はつきりしたアンティテーゼを置いたものであつたには違ひないが、然し漱石はそれ以上に、此所で、

西洋的なるものに対するアンティテーゼとして、日本的なるもの、もしくは東洋的なるもの高唱を企ててゐるのである」（注1）という小宮豊隆の指摘もある。しかし反自然主義であれ反西洋であれ、「草枕」はただに「アンティテーゼ」を唱えるにとどまっていただけなのであるうか。その点について、「草枕」の理論編ともいえる談話「余が『草枕』」（明治三九・一一『文章世界』）には、その独特の存在価値が示されている。

私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ一種の感じ——美くしい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。（略）分り易く例を取つて云へば、在来の小説は川柳的である。穿ちを主としてゐる。が、此の外に美を生命とする俳句的小説もあつてよいと思ふ。

（「余が『草枕』」（明治三九・一一『文章世界』全集第二五卷209頁）

漱石は「草枕」の性質を、「美を生命とする俳句的小説」及び、

「慰藉するといふ意味の小説」と示している。ここには、漱石なりの文学論、「美」の提示があったようである。本論ではこれらについて、「美」の言説との関わりに於て考察したい。

一

当時の文壇を視点とした「草枕」に関わる研究としては、近年特に泉鏡花との関係を論じたものが多く見られる(注2)。「草枕」と文壇との関わりを考える点でこれらの緻密な論考は示唆的である。本研究はこうした現状の一助になることも期している。

以下まず、「美を生命とする俳句的小説」について考える。

漱石が「俳句的」というとき、その思想の背後には、正岡子規の存在を考えねばならないであろう。この件に関する先行研究では、子規「文学漫言」(明治二七・七『日本』)を引用しつつ、「ここで子規は日本の詩の世界は、天然を扱うものであると規定している。漱石の『草枕』には子規のこの考え方が投影しており、その点に俳句的ということの意味がこめられている」とする越智悦子氏の指摘(注3)がある。この指摘は同感し得るものである。また「草枕」の視点人物が画工である理由を、西洋画を世に勧める子規「松羅玉液」(明治二九・四『日本』)の周辺にもとめる西村好子氏の論考(注4)なども見られる。

「美を生命とする俳句的小説」として、その答を子規の俳論に求めたとき、子規は「美」をどのように説明していたのであるうか。以下に見ていきたい。

子規「棒三昧」(明治二八・一二『日本』)には、「美の標準は各自の感情によりて異なり併し其標準は各自の標準と思へる者にして絶対的の標準にあらざること勿論なり」(注5)とある。しかしこうした考え方は子規独自のものとはいえない。森鷗外「審美論」(明治二五・一〇『しからみ草紙』、注6)、大西祝「審美的感官を論ず」(明治二八・六『六合雜誌』、注7)、高山樗牛「美感に就いての觀察」(明治三三・五『帝国文学』、注8)などでも、「美」が対象の性質ではなく、それを認識する主体即ち主観の問題であることが述べられている。

より子規の独自色の強い文章として、この考え方を俳句の実際にも照らして理解しようとした「俳諧反故籠」(明治三〇・一〜三『ホトトギス』)を見ることが出来る。この文章で子規はまず『キレイ』で無き者にも美なる者多し」として、「キタナキモノ」であるが「雅」であるものと、「キレイナルモノ」であるが「俗」であるものとの例を具体的に以下のように分類している。

キタナキモノ(キレイナラヌモノ)／掃溜／乞食小屋／膝行車／紙衣／雑炊／馬糞／垢つきたる人／浪人／(雅)  
 キレイナルモノ／花園／金殿玉楼／箱馬車／金欄緞子／鯛の浜焼／玉／沐浴したる人／大臣／(俗)

そして『キレイ』ならぬ者なれども俳句の材料として美を成すこと屢なり、きたなくして却つて美を成す者を雅といひ、きれいにして却つて不美を成す者を俗といふ」と、「美」の所在を対象の上にあることを一旦は認めかける。しかし、すぐ後に続けてこうした俳句の世界と一見矛盾するかのように見える、主観の問題と

しての「美」という考え方を子規は提示する。

されど（略）きれいな者も雅なる者も材料其物の上にそれ／＼のきれいか雅とかいふ性質を具へ居らぬにはあらねど、主として配合の如何によつて雅なる者も俗となりきれいな者もきたなき者となる、同じ物を活かして使ふと殺して使ふとは俳人の技倆次第也、／＼きれいな者を美と誤るは俗人の誤なり、之に反してきたなき者を美と誤るは所謂雅人の誤なり、所謂雅人の好む所は垢つきたる者ひねつたる者朽ちたる者等にして好まざる所は金殿玉楼錦欄鈍子の類なり、されど垢つきたる者ひねつたる者等必ずしも美に非ず、垢のつき様、ひねくり様によつて美ともなり不美ともなる、金殿玉楼必ずしも不美ならず、其形状と位置と配合の如何によつて美ともなり不美ともなる

さらにこの末尾には、「雅にして（きたなく）しかも美と称すべき句の例」に併せて、「きれいにして（俗に）しかも美と称すべき句の例」として蕪村などの句がそれぞれ一四句ずつあげられている。ちなみに「草枕」第一章にてふれられる芭蕉「蚤虱馬の尿する枕もと」は前者の第一句目にあげられている。この子規による一連の考察の結果、俳句の世界では広く「俗」なものとして否定的にとられがちな「キレイナルモノ」が「美とも不美ともなる」のは、「俳人の技倆次第」であることを示唆することになる。

しかし、俳句の世界では主流ともいえる、「馬の尿」のような「雅」にして「キタナキモノ」が、「俳句的小説」といつているにもかかわらず、「草枕」では見られない。むしろ「キレイナルモノ」に類

するものの方が多く見られる。その理由を考えると、「俳諧反故籠」の内容を参考にすることができらるだろう。「草枕」における「美」を生命とする俳句的小説の内実とは、俳句の世界では「俗」として敬遠されがちな「キレイナルモノ」の「美」を、主観の判断によつて再評価しようとする営為であった。子規のいう「俳人の技倆」とは、即ち「美」を判断する主観そのものに他ならない。つまり漱石が自らの「俳人の技倆」を「草枕」で試みていたのだともいえよう。「草枕」の中で次のように画工も述べている。

唯、物は見様でどうでもなる。レオナルド、ダ、キンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第で如何様とも見立てがつく。（略）芭蕉と云ふ男は枕元へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立て、発句にした。余も是から逢ふ人物を（略）悉く大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなしに見様。尤も画中の人物と違つて、彼等はおのがじ、勝手な真似をするだらう。然し普通の小説家の様に其勝手な真似の根本を探ぐつて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。画中の人間が動くと思れば差し支ない。（略）言を換へて云へば、利害に氣を奪はれないから、全力を挙げて、彼等の動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑑識する事が出来る。（一、全集第三卷111〜113頁）

これは「非人情」に徹する決意を画工が述べる場面であるが、一方で「見立て」と称する考え方が示されている。それは「馬が

尿する」のを、「雅」即ち「美」として受け入れることを指すのではなく、かつて芭蕉がやったように、画工である「余も」また、主観を強く意識することで自ら「美」を決定していくことを指す。そして、「草枕」でいくつかとりあげられる「美」の対象には、子規「俳諧反故籠」で分類された「キレイナルモノ」のうち、少くとも「花園」、「金襴緞子」、「沐浴したる人」の三つを見出すことができる。

まず「花園」について考えてみると、画工の逍遥する「那古井」の温泉場は春の花に満ち溢れている。「草枕」の世界をいろいろどるおびたらしい花のイメージは、ひとつには桃源郷のトボグラフィから導きだされたものであるにはちがいないが、その核心にあるのはミレーのオフィーリア像を寶石のように飾りたてていた森の花であるだろう。(略) そのほかにも木蓮、木瓜、白桃、げんげなど、物語のいたるところに花のイメージは象嵌されているのだ。(注9)と前田愛氏は指摘されている。勿論前田氏の示す桃源郷及びミレーの絵画における花々が、「草枕」に繰り返し示されるモチーフであることに異論はない。しかし、俳句における「キレイナルモノ」としての花々が「那古井」に満ち溢れているとも見ることができよう。

例えば、第九章には画工と那美が二人きりでいるときに地震が起こる場面において、「轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顔を見合はす途端に、机の上の一輪挿に活けた、椿がふら／＼と揺れる」(全集第三巻113頁)と、椿の花が点景されているが、「俳諧反故籠」の「きれいにして(俗に)しかも美と称すべき句の例」

には蕪村「玉人の座右に開く椿かな」という、椿を詠んだ句が紹介されている。また、第十章ではより強く椿の印象が語られている場面がある。

向ふ岸の暗い所に椿が咲いて居る。(略) 其花が！一日勘定しても無論勘定し切れぬ程多い。然し眼が付けは是非勘定したくなる程鮮かである。(略) 見てみると、ぼたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものは只此一輪である。しばらくすると又ぼたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつた俣枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のない様に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。

(全集第三巻121〜122頁)

ちなみに、先の子規が紹介した中には、同じく蕪村の「阿古久曾のさしぬき振ふ落花かな」という、落花を詠んだ句もある。

他に子規が挙げている中には、蓼太「夜桜や三味線引いて人通り」・「春の月桜一枝拾ひけり」と、桜を詠んだ句がある。夜桜でこそないが、第二章には、那美の嫁入りを「御婆さん」が回想する場面に桜が描かれている。

「あい、其桜の下で嬢様の馬がとまつたとき、桜の花がほろ／＼と落ちて、折角の島田に斑が出来ました」／＼余は又写生帖をあげる。此景色は画にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に／＼花の頭を越えてかしこし馬に嫁／＼と書き付ける。

(全集第三巻23頁)

春だから当然といえはそれまでであるが、「那古井」の「花園」はこうした花々に彩られている。

つぎに「草枕」における「金欄緞子」を見ていく。第六章、那美が画工に振袖を着て見せる場面がある。

女は固より口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽に引く裾の音さへおのが耳に入らぬ位静かに歩行いて居る。腰から下にぱつと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解からぬ。只無地と模様のつながる中が、おのづから暈されて、夜と昼との境の如き心地である。女は固より夜と昼との境をあるいて居る。(略)眼も醒むる程の帯地は金欄か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつゝまれて、幽閑のあなた、遠遠のかしこへ一分毎に消えて去る。燦めき渡る春の星の、隣近くに、紫深き空の底に陥いる趣である。

(傍点引用者、全集第三卷81〜82頁)

先ほどと同じく、子規の「句の例」には闌更「春風や君紫の袖かつく」が挙げられている。春の情景に女性の衣服の美しさを点景する趣向を、これらは共有している。

そして最後に、「沐浴したる人」を確認する。以下に引くのは、画工の入浴している所に那美が姿を現す場面である。

何とも知れぬものゝ一段動いた時、余は女と二人、此風呂場の中に在る事を覚つた。／注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらはれた。漲ぎり渡る湯煙りの、やはらかな光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥に、濛はす黒髪を雲と

ながして、あらん限りの背丈を、すらりと伸した女の姿を見  
た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは悉く、わが脳  
裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい画題を見出し得たと  
のみ思つた。(七、全集第三卷89〜90頁)

右の部分は描写開始の一部分に過ぎず、ここから「余は此輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦娥が、彩虹の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた」(同前、92頁)と一連の描写が終了する一文まで、ほんの一瞬にすぎない時間に全集で約三頁の分量を那美の入浴姿に費やしている。漱石の力の入っている様子が特に窺われる個所である。

「美を生命とする俳句的小説」として以上に見てきた事を整理すると、第一に「俳句的」としながらも芭蕉に追従するような「キタナキモノ(キレイナラヌモノ)」を「雅」とする対象選択はしていない事、第二に主観を強く意識することによる「美」の決定の結果、子規の分類で「俗」であると当初否定的に分類された「キレイナルモノ」を再評価しようとしている事が指摘できる。

## 二

次に、「慰藉するといふ意味の小説」について考察したい。

この言葉については、早く羽仁新五氏が『人生の苦を忘れさせて慰藉を与へるといふ意味の小説』の形を執つたことが如何に非社会的な世界に自らを退ける事によつて、その感性的自我の慰藉を保持しようとする老仏的な我が国の中世的隱逸者文学の基調と

同一のものの上に立つてゐるかと思ふことも明らかな事であると云はねばならない」(注10)と、作者の消極的な姿勢を指摘している。しかし、「慰藉」と「美」とのつながりについて「草枕」以前の言説をたどると、次にあげる北村透谷「文学史骨」(明治二六・四月八、二二日・五月六、二〇日「評論」)を一つの源流とみなすことができるであろう。勝本版『透谷全集』では「明治文学管見」の見出しで収録されている文章である。ここでは「慰藉」が「非社会的」なものとはとらえられていない。以下に引用する。

人生何が故に美を要するか(略)美は実に人生の本能に於て、本性に於て、自然に願欲するものなることは認め得べきことなり。(略) 快楽は即ち慰藉(Consolation)なり。(略) 若し通性の快楽をいふ時は、美しくしきものによりて、耳目(Sight and hearing)を楽しみますことにあり。耳には音を聞き、目には物を睹る、之れ快楽を願欲するの最始なり。然れどもマインド(智、情、意)の発達するに従ひてこの簡単なる快楽にては満足すること能はざるが故に、更に道義(モラル・ライフ)の生命に於て、快楽を願欲するに至るなり。道義の生命に於て快楽を願欲するに至る時は単に自然の模倣(イミテーション)を事とする美術を以て真正の満足を得ること能はざるは必然の結果なるが故に、創造的天才(クリエイティブ・タレント)の手に成りたる美を愛好するに至ることも亦た当然の成行なり。美は始めより同じものにして、軽重増減あるものにあらずれど、美術の上に於ては、進歩すべきものなることは是を以てなり。(略)「快楽」と「実用」とは特種の者にして、極めて密接なる関係あるものなり。実用と離れたる快楽は、絶対

的には全然之なしと断言するも不可なかるべし快楽の他の意味は慰コンソレーション 藉なる事は前にも言ひたり。慰藉といふ事は、孤ソリテアクト 立したる立脚点スタンドポイントの上に立つものにあらずして、何物にか双対するものなり。エデンの園に住みたる始祖には、慰藉といふものゝ必要は無かりし。之あるは人間に苦痛ありてよりの事なり。(注11)

「美」による「快楽」が、「実用」の世界に生きる人間に「慰藉」を与えるという意味で、「美」は「実用」と「極めて密接なる関係あるもの」である、と透谷は述べる。さらにこの「慰藉」は、社会生活による苦痛と必ず「双対」するものであると強調されている。ちなみにこの考え方が透谷の特徴的な思想の一つであることは、金子筑水『透谷集』を讀みて「(明治二七・一〇『早稲田文学』)に、「彼れ(引用者注・透谷)は最も能く知れるところ、最も強く感ぜしところのみを言へり、其の評論に生氣ある所以なり。(略)美術は人に快楽を与ふ、快楽は即ち慰藉なり。人生何が故に慰藉を要するか。他なし、人に煩惱苦悶あればなり、而して文学は人生に慰藉を与ふるものなりと。(略)慰藉といふ念の彼れが脳裡に強大なりしを証して余あり。」(注12)とあることで、確認する事ができる。そして、この影響は「草枕」の冒頭部分に見出す事ができる。

山路を登りながら、かう考へた。／智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。／住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、

画が出来る。(略)越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容くわんゆうて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに画家といふ使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長く閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

(一、全集第三卷3頁)

住みにくい「人の世」に疲弊した人の心を寛がせ、豊かにする事を社会における芸術の存在理由とみなす考え方は、社会的苦痛と「慰藉」との一体不離を提唱する透谷の思想と通底する。

例えばこれを、「スペンサー」の説を援用しつつ「而して美術なるものは遊戯と同じき淵源を有す。吾人の全力を生存在競争に注ぐ間は美術の起るべき余地なし。生活の必要を充たしたる余力が美術的作動となりて表はるゝなり。故に美術の特色は利用に遠きにあり、生存上直接の实用を有せざるにあり」とした大西祝「審美的感官を論ず」(明治二八・六『六合雑誌』(注13))と比べてみれば、「草枕」が透谷の思想に近く、大西とは対局に位置することがわかる。他に大西祝には、

詩では読む人が實際上の必要に迫られて悲哀の事柄を読んで泣くのではありませぬ、必要はないけれども、自由に泣くのであります(略)若し實際上の必要に迫られて我性情の需用を満足せしめたならば、其満足に伴ふ多少の快楽はあるに相違ありませんが、必要に迫られての事でありませぬ、亦多少の束縛を感じぬと云ふわけには行きませぬ、詩的の快楽は此束縛から離れたるの有様であります(略)詩的の興味は言

ひ換へれば必要に根ざしたる遊び事であると云つて宜しからうと存じます、

(「詩歌論」(明治二五・七九、一一―一二『青年文学』))  
 という文章もある。対してこれを念頭においてあるかのように、芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。(略)それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ点に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは余計に活動するだらう。それが嫌だ。

(傍点引用者、一、全集第三卷9頁)

と「草枕」にはある。ここでは大西「詩歌論」の内容をある程度認めながらも、しかし画工はそれをうけ入れるつもりがない事を明言しているようである。そしてこれに続けて、「東洋の詩歌」に理想を求めその「功德」を「汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすり寝込む様な功德である。二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。」(同前、10頁)と改めて実社会に必要とされる「睡眠」、即ち透谷のいう「慰藉」の重要性が記されている。「慰藉するといふ意味の小説」とは右にみてきたように、その源流の一つには北村透谷の思想が横たわっており、実社会の生活で疲弊した人々を救う芸術の存在理由を含むものであった。漱石がそれを読んでいたかは不明であるが、同質のものがここにある。

そして、これらの意味で「慰藉する」といふ意味の小説」が漱石の  
大いに期待するところであつたのは想像に難くない。しかし、こ  
の理想は後に表面的な縮小がなされる。その理由については後述  
する。

### 三

漱石の透谷受容について、状況に即して補足をしておきたい。

漱石の全文章で北村透谷についての具体的な言及は見られない。  
故にそのつながりは必ずしも明白なものと言ひ切れぬ所がある。

しかしながらこの二人の関係について研究史では、「二人が何か特  
別な、具体的な関係を持つていたということではない」との立場  
をとりながらも、両者に関する七つの共通点と五つの相違点をま  
とめた小沢勝美氏（注14）や、漱石の初期文章と透谷とを比較  
した神山睦美氏（注15）などの好論が見られる。また『透谷集』  
（明治二七・一〇 文学界雑誌社）や『透谷全集』（明治二五・一  
〇 博文館）の出版された事実を考慮に入れると、漱石が透谷の思  
想にふれた可能性は充分にあると考えられる。

また、「草枕」以外の漱石テクストにおける、「慰藉」の用例に  
目を向けると、「吾輩は猫である」第十一章（明治三九・八『ホト  
トギス』）には、人間として個性を保全するために、結婚という制  
度をなくすべきだと主張する苦沙弥に対して、次のように反対す  
る東風が描かれている。

「先生私は其説には全然反対です」と東風君は此時思ひ切つ

た調子でびたりと平手で膝頭を叩いた。「私の考では世の中に  
何が尊いと云つて愛と美程尊いものはないと思ひます。吾々  
を慰藉し、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く兩者  
の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、  
同情を洗練するのは全く兩者の御蔭であります。だから吾人  
はいつの世、いづくに生れても此二つのものを忘ることが  
出来ないです。此二つの者が現実世界にあらはれると、愛は  
夫婦と云ふ関係になります。美は詩歌、音楽の形式に分れま  
す。夫だから苟も人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と  
芸術は決して滅する事はなからうと思ひます」

（全集第一巻549頁）

「幸福」などと並んで「慰藉」は、「愛と美」によつて与えられ  
る利益の一つとして挙げられている。そして、現実世界において  
「美は詩歌、音楽の形式」になると示される。「美」と「慰藉」と  
のつながりは、ここでは「慰藉」だけにとどまるものではないが、  
以前に見てきた関係と同様のものである。

また、同時に「愛」についても、その重要性を東風は語ってい  
る。これを透谷の思想と、以下に比較してみる。

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き  
去りたらむには人生何の色味かあらむ」（北村透谷「厭世詩家と女  
性」〈明治二五・二一『女学雑誌』〉）と述べているところから分か  
るように、透谷もまた、「恋愛」の重要性を指摘している。「高尚  
なる意あるものには恋愛の必要特に多し、そは其心に打ち消す可  
からざる弱性と不満足と常に宿り居ればなり、恋愛なるものはこ

の弱性を療じこの不満足を愈<sup>い</sup>さんが為に天より賜はりたる至大の恩恵にして男女が互に劣情を縦にする禽獸的慾情とは品異れり」(「歌念仏を読みて」(明治二五・六『女学雑誌』)、また、「夫れ恋愛は透明にして美の真を貫ぬく、恋愛あらざる内は社会は一個の他人なるが如くに頓着あらず、恋愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく飯を去つて実に就き隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ」(前出「厭世詩家と女性」)などの言説にみられるように、「恋愛」によって与えられる利点を、いうなれば社会的な人格の完成に認めている。そして、その延長線上にある結婚についても、「婚姻の人を俗化する人は人を真面目ならしむる所以にして妄想滅じ妄想殖ゆるは人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基ひなる可<sup>い</sup>けむ」(同前)という立場を透谷はとっている。

これらの用例が即東風の発言の下敷きとなつていゝとは勿論言い得ないが、しかし、「愛と美」の現実世界における重要性の指摘、即ち透谷の影響を受けたらしい言説がここにも見られることを、指摘しておきたい。

#### 四

ところで、子規は前出の「俳諧反故籠」で次のようにも述べている。

俳諧は何の用をか為すと問ふ者あらば何の用をも為さずと答へん。何の用をも為さぬ者は無用の者なり。(略)無用といふことは一步を譲りて言ひたるものなり。若し詳かに言はざ有

用無用といふことの定義を定めざるべからず。若しこれに適當なる定義を施さば美術文学(俳句を含む)は有用の部に属すべし。支那古聖人の教に詩と楽とを重んじ、方今欧米諸國にて美術文学を賞励するが如き皆其有用なるを認めたればなり

どのように「俳諧」や「美術文学」が「有用」なのか、このことについて子規は明確な説明をしようとはしない。前半においては「無用の者なり」とまで言っている。子規自身文学の必要性は直感的に感じ取っていたのではあるが、その根本理念をつまびらかにするのは好まなかつたと見受けられる。

また、その一方で透谷は俳諧の「美」について否定的な見解を述べている。

道徳の府なる儒学も平民の門を叩くことは稀なりし、高等民種の中にすら局促たる繩墨の霸絆を脱するに足るべき活気ある儒学に入ること許さざりしなり。精神的修養の道一として平民を崇むるに適するものあらず、偶俳道の普及は以て彼等を死地に救済せんとしけるも彼等は自ら其粹美を蹴棄したり。(徳川時代の平民的理想)(明治二五・七『女学雑誌』)

恐らく透谷は、「草枕」でも否定的に捉えられている芭蕉「蚕虱馬の尿する枕もと」などの句を想定して、このように述べているものと思われる。

これら言説に対して、漱石の「草枕」をめぐる言説はどのような位置しているだろうか。まず子規が持つ、文学の有用無用の問題に対しては、子規が明確にしなかつた文学の存在理由を模索し、

「慰藉」という一つ答えをだしている。また、その一方で透谷の、俳諧の美の否定に対しては、彼の評価し得なかつた俳諧の美的側面の指摘に成功している。こうした意味で、漱石の「草枕」に関する言説は、ただに思想をつなぎ合わせた両者のエピソードではなく、文学における問題を漱石なりに解決したものといえよう。

しかしながら、テクストを見ていくと「草枕」の画工が、子規と透谷とが抱える問題に過不足なく対応しているかどうかは判断が難しいのではないだろうか。「美を生命とする俳句的小説」の側面は比較的明白であるが、そこから得られる「快樂」が「慰藉」を導き、ひいては現実社会の益となつていくかは現代の読者に限らず当時でも確實ではなかつたろう。この画工は、第十三章において、「愈現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云ふ」（全集第三巻167頁）と、「現実世界」と関わることをいかにも残念そうに述べるのである。

この問題について漱石自身どうとらえていたか。漱石は後の書簡で、「美」だけを追求する文学に対して否定的な見解を示している。その中で「草枕の様な主人公ではないけない」といい、さらには虚子などの「俳句連」をも含めて批判している。以下に引く。

君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文学者だと澄まして居る様になりはせぬかと思ふ。現実世界は無論さうはゆかぬ。文学世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此点に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文学者ではつまらない。といふて普通の小説家はあの通り

である。僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。それでないと何だか難をすて、易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文学者の様な気がしてならん

（「明治三十九年一〇月二六日付鈴木三重吉宛書簡」、全集第二二巻書簡番号695番）

この書簡には漱石の目指す二つの方向性が如実に示されている。即ち「ウツクシイ」ことを追い求めて「別世界」を逍遙する「俳諧的文学」と、「維新の志士の如き」と表される「現実世界」と地続きの文学とである。抑も「余が『草枕』で語られた内容に拠れば、「俳諧的文学」の「現実社会」とのつながりは実現されたはずであった。しかしこの書簡では、「草枕」の人々に「慰藉」を与える役割という点での自信は小さくなつていようである。また、それだけではあきたらず、より「烈しい精神」を求める様子すら窺える。なぜ「慰藉」を与える文学の自負は縮小したのか。この点について漱石自身次のように述べている。「明治三十九年十一月」の日付をもつ『鶉籠』自序（明治四〇・一春陽堂）を引用する。

『鶉籠』は「草枕」が収録されている単行本である。

もし「鶉籠」が是等の士に幾分の慰藉を与ふるを得ば著者の願は足る。／著者の描けるものが、如何に読者の心に映じて、如何に読者の情を動かすかは、著者の問ふ所にあらず。否問はんと欲するも著者の権外に落つ。「鶉籠」を公けにしたる著者は、たゞ之を公けにしたる迄にて、毫も読者の情緒と感興

とに干渉して、内部の生命を支配するの意あらず。

(傍点引用者、全集第十六卷36頁)

「草枕」が「慰藉」を与えるという理想を、漱石は全く放棄しているわけではない。しかし、当初「草枕」に期待した「慰藉する」といふ意味の小説」が、作者の立場から望めるものではない旨がここに端的に述べられている。

そして、その理由として「内部の生命」という言葉を使っていることは注目に値する。というのは、周知の通りこの言葉は透谷に出自があるからである。「詩人哲学者の高上なる事業は、実に此の内部の生命を語るより外に出づること能はざるなり。内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり、詩人哲学者の為すところ豈に神の業を奪ふものならんや、彼等は内部の生命を観察する者にあらずして何ぞや」(「内部生命論」(明治二六・五『文学界』))という透谷の言説がある。漱石はこの思想にふれていたのではないだろうか。少なくとも「内部の生命」という言葉とその意味する所においては透谷の用法と共通すると思われる。

### おわりに

「草枕」が生れた文壇の状況をおおまかにふりかえっておきたい。明治三十九年の文壇は作物に恵まれた年であった。伊藤左千夫「野菊の墓」(明治三九・一『ホトトギス』)、二葉亭四迷「其面影」(明治三九・一〇・一〇〜一二・三一『東京朝日新聞』)などがこの年

である。漱石自身多作であつたし、自然主義といわれる作家達もまた活発に活動していた。一月には自然主義文学の中心となつた雑誌『早稲田文学』が復刊(第二次、主筆島村抱月)、六月にはその姉妹誌といわれる『趣味』(編集水谷不倒)が創刊された。自然主義文学・反自然主義文学という二極化の中、作家達は小説を執筆する傍ら激しく論戦を重ね、それぞれ独自の文学活動を摸索していた。こうした状況で島村抱月は次のように文壇に呼びかけた。

我れおもへらく、情緒的よし、宗教的よし。されども尚此の外に、日本の現代といふ特殊の事情に応ずべき文芸観なかるべからず。其は、正しく日本の若しくは東洋的文芸の發揮といふことにならんか。時は国興こり、国民的自覚生ずるの秋なり。東西洋の感情には根底に於いて到底容易に混ざらざるの相違あり。此の感情の發揮たる文芸は、さればまた、東西別彩として存するも当然の事ならずや。文芸若し終には世界に統一せらるべしといはゞ、それにとりも可ならん。只其の前に当たつて、先づ十分に自家を發展せしめんと要するなり。

(島村抱月「囚はれたる文芸」(明治三九・一『早稲田文学』、注16)

漱石が「余が『草枕』において、「で若し、この俳句的小説——名前は変であるが——が成立つとすれば、文学界に新しい境域を拓く訳である。この種の小説は未だ西洋にもないやうだ。日本には無論無い。それが日本に出来る」とすれば、先づ、小説界に於ける新しい運動が、日本から起つたといへるのだ」といっ

ているのは、英文学者としての漱石の博識に基づく所見である(注17)のは勿論だが、一方ではこうした抱月の呼びかけに見られるような、日本独自の文学を求めた文壇の風潮に応えたものではなかっただろうか。「草枕」は一つの文学作品であると同時に、日本独自の「新しい運動」の形を希求する文壇への、自然主義・反自然主義という唾み合いを超えた試作品の提示でもあったのである。

最後に改めて、「慰藉するといふ意味」について私見を披瀝したい。この小説の社会的な役割については、飽くまでも作者の立場から、読者に対する限界を漱石が知っていたことは既に見てきた。

しかし、漱石自身にとってはどうだったろう。「草枕」を執筆していたこの時期の漱石の精神状態について、宮沢健太郎氏は鏡子夫人の入水自殺未遂という事実を踏まえて「このことが逆に漱石にフィードバックして、強い衝撃となり、八年後に『草枕』として具象化されたのである。」(注18)と指摘され、また榎林滉二氏が「まさに地獄の時代である」(注19)と表現されている。後日「道草」に描かれるような鏡子夫人との関係が、「草枕」執筆時に漱石を苦しめていたことは紛れもない事実である。その当時の様子を知る人物として東大講師であった松浦一の証言を見る事ができる。

私の知つて居る大学奉職時代の先生(引用者注・漱石)は生活と思想の両方面で奮闘されてゐたためか、形容には段々と人生の疲れと云ふやうな様子が加はるやうに見えた。(略)私のはあのやうな疲れ衰へたやうな状態から、『草枕』のやうな道

遥遊の文学が生れたのを、真に意味のある事と思つてゐる。

(松浦一『文学論』の頃)(大正六・一『新小説臨時号』、注20)

松浦一は「草枕」の「真」の意味を了解していたと思われる。少くとも漱石自身は直面する人生の苦痛から「草枕」の美的世界をさまよう事によって「慰藉」を得て、救われた。逆に言えば「余が『草枕』のなかで述べられた「慰藉するといふ意味」は漱石の極めて内面的な実感で存在していたのである。

(注1) 小宮豊隆『漱石の芸術』(昭和一七・一二岩波書店)。

(注2) 上田正之『物語の古層』(入水する女)―『草枕』と『春昼』―(平成九・三『国語教育論叢』、中島佐和子『草枕』の成立―『高野聖』との比較から―(平成九・八『国文』、加藤禎行「変奏される『草枕』―泉鏡花『春昼』『春昼後刻』からの射程―(平成一一・六『国文学研究』、小橋孝子『草枕』論―鏡花文学との交響をめぐって―(平成二二・一〇『国語と国文学』など。

(注3) 越智悦子『草枕』の美に対する一考察(昭和五六・三『岡大文論稿』)。

(注4) 西村好子『俳句的小説』としての『草枕』、『散歩する漱石―詩と小説の間』(平成一〇・九 翰林書房)。

(注5) 引用本文は『明治文学全集53』(昭和五四・四 筑摩書房)による。以下の正岡子規のテキストは、すべてこ

れによる。

(注6) 「美とは何ぞと問ふに先だちて、美は何処にかあると問ふこと肝要なり。／意識より外にあり、外物にありとおもふは最も穢き考なるべし。これを穢き實際主義といふ。意識にて客(所)と見る物を実の物ぞとおもへるなり。この考の非なるをば哲学を待たずして知るべし。自然学によりても曉るべし。色といひ、声といふものは主(能)感のみ。これに対する実は分子と極微との動きまのみ。美は色声などの組立より生ずるものなれば、これはた主感にありて意識より外の実にあらむやうなし。」(引用本文は『明治文学全集79』(昭和五〇・二 筑摩書房)による。)

(注7) 「美は『あらはれ』にあり見えたる様にありと云ふの論は、カントの一二の言を縁としてシルレルの説ける所に既に其根本思想を見るを得べく、ヘーゲルに至つてますます、明に、シヤスレル、ハルトマン等に至つて更に精しくなりたるものなるが、今は姑くハルトマンに従うて説かんに、美象は吾人の主観を離れたる実在に存せず、一物を美はしと観るときは其物の実にあるの様は問ふ所にあらず、吾人の主観に見えたる、あらはれたるの様、是れ美の在る処なり、画工の描けるもの、俳優の演ずるところ、是れ実物にあらず、唯だ看る者の主観にあらはれたるの象なり。」(引用本文は注6に同じ。)

(注8) 「美学の研究者が、その研究の初めに先づ以て認めぬ

ばならぬ二個の事実あり。美は主観の側より見て感情なること、而して是の感情の快感なること、是也。」(引用本文は『明治文学全集40』(昭和四五・七 筑摩書房)による。)

(注9) 前田愛「世紀末と桃源郷―『草枕』をめぐる―」(昭和五五・三『理想』)。

(注10) 羽仁新五『『草枕』の文学理論的基礎とその本質について』(昭和二三・一一『国語と国文学』)。

(注11) 引用本文は『明治文学全集29』(昭和五一・一〇 筑摩書房)による。以下の北村透谷のテキストは、すべてこれによる。

(注12) 引用本文は『明治文学全集50』(昭和四九・一〇)による。

(注13) 引用本文は注6に同じ。以下の大西祝のテキストは、すべてこれによる。

(注14) 小沢勝美『透谷と漱石 自由と民権の文学』(平成三・六 双文社出版)では共通点として、1 家庭環境、2 専攻、3 思想と気質、4 恋愛観、5 社会・文学観、6 対人民、7 作品の主題、相違点として、1 生立ち、2 女性関係、3 生活の型、4 思想の傾向、5 宗教、があげられている。

(注15) 神山睦美『夏目漱石論―序説』(昭和五五・六 国文学社)。他に、北川透氏『北村透谷試論I―『幻境』への旅』(昭和四九・五 冬樹社)に、透谷「厭世詩家と女性」

に見られる「対思想」が漱石『それから』、『彼岸過迄』、『心』で展開したとする説がある。また平岡敏夫氏（『漱石序説』、昭和五一・一〇）は、「二百十日」に透谷「眠れる蝶」、「蝶のゆくへ」、「双蝶のわかれ」のそれぞれの影響を示唆している。

（注16）引用本文は『明治文学全集43』による。

（注17）「英人の文学は安慰を与ふるの文学にあらざ刺激を与ふるの文学なり。人の塵慮を一掃するの文学にあらざして益人を俗了するの文学なり。彼等は自ら弊賣の中に坐して益其弊を助長す。阿片に耽溺せる病人と同じ。」

（断片三二D）〔手帳④16・30縦書〕「全集第一九巻205頁）。

（注18）宮沢健太郎『「草枕」の文体論的考察』（平成九・一

二）『白百合女子大学研究紀要』。

（注19）榎林滉二『「草枕」小考——一つの原景について——』

（昭和六二・一一）『佐賀大國文』。

（注20）引用本文は『漱石全集別巻』168頁。

※夏目漱石のテキストは『漱石全集』（平成五年版、岩波書店）による。

※引用本文の旧字を私に新字に改めたところがある。

（あいかわ なおゆき）